

読売歌壇

小池 光選

看護師になりたる女孫吾と妻に年玉くれる 涙は湧くも

【評】これはうれしいうらなう。つい近年までお年玉をあげていた孫娘、いまは立派な看護師になって、逆にお年玉をくれる。思わず涙がこみあげたのは誇張ではない。

洗面の後にクリームを塗ることあり九十七歳になるわが顔に

【評】九十七歳という年齢がすごい。全投稿者の中で最高齢の方だろう。それでも顔を洗ってクリームを塗る。いくつになっても肌は大事。その気力、実行力、たいしたものだ。

ひとすぢの糸を掴みて降りきたる蜘蛛は仏の使ひのことし

【評】一本のみずから吐いた糸にすがって蜘蛛が降りてくる。じつと見ているとなんとも神秘的だ。仏の使ひということがよい。

特番の六十年前の「紅白」を見てたらふつと胸が熱く

校庭に雪なるま在り校長が夜中に造りし事のち知れる

亡き夫を想う老婦の歌読みて米研ぐ妻のうなじを見つむ

【草枕】二十年ぶりに読み返すいまに変わらぬ世の住みにくさ

鉄橋を渡る電車を眺める酒も煙草も止めた男が

障がいのある子の就職決まりしと賀状にありて

夫と喜ぶ

お父ちゃんお母ちゃんと呼んでみるだあれもない青空の下

町田市 岩本 房子

栗木 京子選

新婚の孫が年賀にきただけで鶴がおりたり枯木の家に

【評】孫が年賀に訪れた。しかも新婚のパートナーを連れて。この上もない喜びである。「掃き溜めに鶴」ならぬ「枯木の家」への鶴の飛来を感じたところがユーモラス。

年明けてボジティブになる初詣とにかく今年ベルリンに行く

【評】初詣は新年の目標を確認する行為とも言えよう。「ベルリンに行く」という具体性に力がかもっている。自身を励ますように「とにかく」と言い添えたことも楽しい。

そばにいて介護したいが会うことも規制され老いの恋もどかしい

【評】入院中の人への介護。親族でない許可されない。心と心がつながっていても会うこともできないのだ。結句に実感がこもる。

冬の夜の眠り待つときまなづらにちつと見下ろす鼻がある

バス停に暗記シートの落とし物拾ひて冬の光に驚く

花かつお踊る焼ソバ施設より一時帰宅の姉に振る舞う

自らも設計に加わったという旧き家いまこぼた

るるを夫は見つづ

すずめ蜂の好みし高き松の枝を仰ぐことなし切り株となれば

あれこれとやり直したき子育てでもやさしい子それでいいじゃん

わらべ歌で和気あいあいと操し「焼いてさ食ってさ」は小声で

東京市 大室 英敏

俵 万智選

雪の夜の旅館二階の踊り場にタイムマシンのやうな自販機

【評】上の句の場面設定が秀逸だ。「踊り場」という語からは階段であることがわかり、古めかしい旅館が想像される。そこに設置された自販機が何やら不釣り合いなのだろう。下の句の比喩がしっくりくる。

一月の予定いくつ引き写し手帳同士の引継ぎ終える

【評】手帳の使いはじめは、この作業だ。日常の中の「あるある」が、みごとに言語化されている。手帳から手帳への、労いやエールが聞こえそうなの句の擬人化も、いい。

すべり台行くよと言ってすべる子をプールキーパーみたに受ける

【評】位置を予想して、しっかりと受け止める。実感のある比喩が魅力的だ。

眼鏡の曇ためセルフハグのやうわれを抱へてねむりへ降りぬ

クリミーな罪悪感だ子が眠りアイスを夜にひとり味わう

貝殻のきれいな模様を知らないで内側で貝はしずかに生きる

ぼつぼつとできないことの増えてゆく母はしずかに雨を見ている

それからね、それからね、つて三歳の流れつつけることは蛇口

お湯を注げばカップスーパのまろやかさ本心でなくてもううれしいよ

泣いたってことだけ覚えていた映画もついでど観てもういちど泣く

東京市 武藤 義哉

黒瀬 珂瀾選

徹夜した露店の人が手短に黙ってタルマと初日に折る

【評】大晦日から元朝にかけて、初詣の参道に店を出したテキ屋さんだろう。徹夜の仕事を終えて、初日へ手短に拍手を打つ。新年の気分を少し味わい、また商売に戻るのだ。

手びねりで作られている私たち蠟梅みたに向こうが透けて

【評】手びねり、は陶芸用語だが、なるほど私たちも世間の手びねりで作られた存在だ。あまりにも捻られて向こうが透けるほどに薄っぺらい我ら人間の姿。美しい蠟梅からそんな発想をしてみよう、作者のこころを思う。

波の間に初冠雪の桜島養えて美しき薩摩の入江

【評】晴れやかですね。これぞ薩摩の新春といふべきめでたさ。今年の平安を願います。

自国では元首の免罪主張して他国の元首逮捕の派兵

B.M.W.に乗りたるごとき華やかさトラクター駆るケランドシニア

窓越しの日にうたた寝を食ひぬ逝きし人々おもふはさまの

元日のたった一つのアドバルーンたった一つはあんなにこわい

七草の粥を炊くとき少しだけ優しい人のふりをする朝

与野党の動きを今朝も聴きながら世論のやうにわれる前髪

裏のない言葉だけを集めつつ臉を閉ちてアシジを想ふ

新潟市 柴田 和彦

次回は10日(火)掲載予定

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから 右の影絵はえほうまき